



独創力の 秘密

川崎ゆきお

「子供の頃、何をしていましたか？」

「はあ」

「子供の頃、何に熱中していましたか？」

「えっ」

「子供の頃、何が楽しかったですか」

先輩の問いかけだが、高田はその意味をまず考えた。どういう意味で、そんなことを言い出したのかだ。場所は喫茶店のような飲み屋。静かな場所だ。横文字職業の人が多く来るらしい。

「どの時代でしょう。子供の頃とは」

「まあ、中学へ上がるまででしょうか」

高田がこの洋風飲み屋に誘われたのは、何らかのコミュニケーションだと思っている。先輩は何か言いたいのだろう。きっと高田の仕事ぶりについての何かだ。それと子供時代がどう結びつくのかを、思い巡らせているのだが、出てこない。だから、普通の懐かしい時代の思いで話になる可能性もある。しかし、そういった雑談をこの先輩とはあまりしないのだ。

「特にありません」

「ない」

「あ、楽しかったような気がします」

「そうですね。中学へ上がってからよりも、小学生時代は楽しかったですよ。さて、何が楽しかったかですよ」

「ああ」

高田は思い出せない。

「クリエイターの原点は子供時代ですよ。そこで熱中したことが、将来を形作っています。ただ、それは大人になると、廃れますがね。色々とし恵が付いてきて、別のことをやり出す。しかし、原点は子供時代にやっていたことです。さて、何でしょう。高田君の場合は」

「はあ」

「一度聞いてみたいと思っていたのです」

「ああ、クリスマスケーキがいつもより大きかったのが楽しかったです」

「そういうのじゃなく、何か能動的にやっていたことです。趣味は何でした」

「しゅ、趣味ですか。そんな小学生だったのですよ。その頃の趣味は何かと、考えたこともありません」

「じゃ、何をして遊んでいました。特に楽しかったことで」

「おもちゃを買ったり、模型を作っていました。でも、それは誰でもやっていることです」

「プラモデルですか」

「はい」

「完成したあと、色を塗ったりしましたか」

「いえ、なかなか完成には至りませんでした。スーパーカーを作ったのですが、モーターと歯車がうまく噛み合わなくて、結局モーターの振動で、ビビビビと動いただけです。タイヤは回っていません」

「じゃ、模型作りは駄目だったのですね」

「いえ、駄目でしたが、好きでした」

「他には」

「近くに田圃がありまして、小川があって、そこで蛙とかを捕まえたりしました」

「蛙ですか」

「すぐに見つかるので。あぜ道を歩いていると、飛び出すし。だから捕まえやすかったのです」

「昆虫採集のようなものは」

「蜂を捕まえて、マッチ箱に入れて飼ってました」

「ほう、それは独創性がありますねえ」

「学校で流行っていたのです。教室に持って行って、見せ合うのです」

「それは誰が言い出したのですか」

「さあ、分かりません。僕ではありません」

「それは楽しかったですか」

「はい、流行っている間は熱心にやりました。みんながやめてからは、もう楽しくなくなりました」

「特に何か、熱心にやり続けていたことはないのですか」

「はい」

「想像力の原点は子供時代にあるのです」

「そうなんですか」

「子供時代のその世界を持ち続ける。あるいはそれを復活させる」

「あ、はい」

残念ながら高田には当てはまらないようだ。

「高田君」

「はい」

「君は器用に仕事をする。それに早い。また小綺麗だ」

「はい」

「しかし、独創性、オリジナリティーがない」

「あ、はい」

「何とかしないとね」

子供時代の話が、ここに繋がるわけだ。高田は、それをもっと早く関知し、子供時代に熱中していたことを用意すべきだった。

高田は挽回するため、熱中していたことを思い出そうとしたが、やはり出てこない。家でも学校でもそこにいるだけで一杯一杯の子供だったのだ。

ただ言えることは、場に馴染み、無事にそこで過ごせることに最大限の努力を果たしてきた。

流石にこれは言えない。

そして、今も高田は自分の保身だけを考えて行動している。今日は失敗したようだ。帰ってから一人で反省会をするつもりだ。

了